

平成 17 年度名誉員 種市 健 氏

～現場力から俯瞰力を高める～

後藤 清

(株)関電工



鉱山の電気設備、現場の技術力、コストダウン、IGCC、パワーアカデミー

1. はじめに

種市健氏は東京電力に入社され、高度成長期にあった電力システムの構築や安定供給に尽力されるとともに、技術部門のトップである副社長になられてからは、持ち前の先見性とリーダーシップでNAS電池や石炭ガス化複合発電(Integrated coal Gasification Combined Cycle: IGCC)などの大型開発に大きな貢献をされた。

また、電気学会会長も歴任され、学会の改革・活性化に尽力されるとともに、さらに日本科学技術振興財団での副会長も務められ科学技術教育の普及にも大きな貢献をされた。

一貫して現場の技術力の大切さを唱えられるとともに、そのブレることのない信念、飽くなきチャレンジ精神と熱意には尊敬の念に堪えない。さらに大変頼りがいのある、人間味に溢れた素晴らしい先達である。

2. 聞き取りの概要

2.1 生い立ちから修学時代まで

種市氏は1935年に秋田県の小坂鉱山という十和田湖近くの銅を中心とする鉱山の町で生まれた。父君は鉱山の電気技師で、その関係もあり幼少の頃から科学に興味を持った、今でいう理科系少年であった。当時鉱山の電気設備は発電から送電、消費まで一体的に構成されており、まさに一貫体制を身をもって体験された。このことからご本人も「何時も身近にある電気の技術に対する感動が大きかった」と述べられている。

中学の時に東京に転校され小山台高等学校に進学された。大学は早稲田大学理工学部に入社され、迷うことなく電気工学科を選択された。その動機として早稲田大学には植野教授、東京大学には福田教授というその分野の巨人がいることを聞いて選んだようであり、さらに電気工学科では植野教授の電力系統工学を専攻された。卒業論文は「水力発電所の出水確率分布が電力の予備量をどう決定するか」というテーマであったが、特筆すべきはそれを電力中央研究所に行って研究されたことである。今では学生が電力中央研究所や企業で卒論や修論を書くのは珍しくない

が、当時としては画期的なことと思われる。この時期は本人も言っておられるように安定度など電力技術の揺籃期^{らん}でもあり、学生時代に、電力中央研究所という理論と現場を結ぶ、より実践的な環境で修学されたことが後の種市氏の実行力、技術哲学を形成したものと推察される。



種市 健 名誉員

2.2 東京電力時代

1959年4月に東京電力に入社された。電力会社の選択に当っては父君の「電気が本流の会社へ行け」というアドバイスが効いたようである。まず新入社員として沼津支店の水力発電所の現場に配属された。当時は電力会社も直営で点検修理していたこともあり、配電盤室、機械室などに多くの職工さんがいたと言われている。彼らは機械の振動や音を聞いただけでその状態がわかり、その体験からも現場の力と前向きな心が大事なことを学んだと述べられている。現在はそうした業務の大部分は社外に委託されているが、このような経験から自社での現場の技術力の大切さを常に唱えられている。

こうした現場の経験を積まれて会社の中核である本店の系統計画課で担当から副長を、施設業務課で課長をされた。ここでは東京電力の現在に至る系統の骨格作りに尽力されたが、なんといっても当時の個性のある上司に大きな影響を受けられ、それぞれの良いところを吸収され管理者としての磨きを一層かけられたように思う。

さらに営業第一線現場の長である江東支社長を歴任され、1985年に本店の工務部長に就任され、いよいよ種市氏のリーダとしての本領が発揮されてくる。

工務部は水力発電、送電、変電などの設備を運営、保守、建設する膨大な部門で部長在任中には歴史に残る大きな事故があった時代でもある。特に1987年7月の全系の20%を停電させた電圧不安定による大停電や同じ年の12月の千葉県東方沖地震による房総変電所の変圧器事故、さ

らには取締役時代ではあったが 1995 年の阪神淡路大震災などである。当時筆者は変電課の副長として仕えていたが、陣頭指揮され迅速的確な指示命令を与えていた種市氏の姿を今でも鮮やかに思い出すことができる。非常に困難な状況に際しても「一步後退二歩前進」と叱咤激励し立ち向かわれたのは、部下としては厳しい面もあったが、大変頼りがいがあり人間味に溢れた上司であった。

顕著なのはこうした事故や災害への対応ばかりでなく、コストダウンを全社挙げてのプロジェクトとして推進されたことである。コストダウンは今では当たり前のことのように思われているが、当時は量の充足に追われ安定供給が何にもまして最優先であった。

そうした中で定量的かつ論理的な視点に立ってどのようなコストダウン施策をとるべきかを率先して主導され、「マリーングайд」という冊子にまとめられた。この考え方が現在まで脈々と続いているのはいうまでもない。

工務部長から取締役、常務、副社長と順調に昇進され、功績は枚挙に^{いとま}遑がないが、あえてあげるなら NAS 電池の実用化と IGCC の推進であると思う。特に IGCC についてはエネルギーの多様化と石炭の将来性を見通して、官民での 1 000 億円にも上る^{なこそ}勿来での実証プロジェクトを実現された。東京電力が半分に近い研究費用を負担することから社内での反対が極めて強い中、ブレることなく経営層を説得し実現に至った経緯は、近くで見ていた筆者としては大変感動したものである。IGCC は当時は理解が薄かったものの、現在のように原子力が不透明の中、石炭を有効活用していく必要性が一層高まったことを考えると、誰もがクリーンに石炭を使用するこの技術に賛成をするであろう。種市氏が信念と先見性を持って強いリーダーシップを発揮された賜物といえよう。

一方電力技術の現状には大変危機感を持っておられて「絶滅危惧種」の恐れがあるとまで言及されている。このような思いから東京電力の電気の史料館の設立に尽力されたり、さらにパワーアカデミーを設立して電力・重電技術のオープンなネットワークを作る活動にも中心となって牽引されている。また 2002 年には電気学会会長として活性化に尽力されるとともにいろいろな改革にも当たられている。

2.3 パワードコム社長から現在に至るまで

2001 年に東京電力を退社されグループの通信会社であるパワードコムの社長、会長を 3 年間された。公益の枠のはまる電力とは全く異なる通信業界に身を置かれ、スピー

ドと仕事のやり方の違いを痛感されたようである。

通信が今のように成り立っているのは技術開発があるのだと、新しい技術があるから過酷な競争にも耐えられるのだとも指摘されている。翻ってこれは電力への言及であるとも思う。絶滅危惧種とも言われているが、全国的にみるとまだまだ優れた研究グループがあり、これをいかに支援し、持ちこたえ世界に展開していくかが課題であるとの思いを強く持っておられるようである。

パワードコムの会長を退任されてからはさらに幅広い領域に活動の場を広げられ、若者や子供の理科離れへの対策に尽力されている。具体的には北の丸にある科学技術館を運営する日本科学技術振興財団の副会長に就任され、子供の科学技術への関心を高める活動を主導された。先行きへの懸念から今でも技術に対する熱い思いを持って当たっている生き方は後輩として本当に敬意を表するばかりである。

そのほかにも多くの業績があるので、ぜひ「平成 24 年度調査報告書 先達は語る (5)」を読んでいただきたいと思う。

3. さいごに

これまでの経験から若い人へのメッセージとして下記の 4 点を挙げられている。

1. 現場を大事にし、育てること
2. 一段高い立場で考える^{ふかん}俯瞰力を持つこと
3. 目的から back cast しつつ、その達成に向けて最も有効な力を集め、マネージする力を育てること
4. いろいろなレベルの対象に説明、説得する力を磨くこと

聞き取り実施要領

実施日時：2012 年 3 月 8 日（木）14：00～17：30

実施場所：東京電力本店会議室

聞き手：後藤 清（(株)関電工）

永田宇征氏（独立行政法人国立科学博物館）

同席者：電気技術オーラルヒストリー調査専門委員会

中村正規委員（元(株)テプシス）

木村達也幹事（(株)東芝）



後藤 清

ごとう・きよし（上級会員）

1976 年東京大学大学院電気工学修士課程修了。同年東京電力(株)入社。2008 年 KDDI(株)入社。2011 年(株)関電工入社。2014 年取締役専務執行役員技術開発本部長。現在に至る。